

ただいま、途中下車

丹波恵津子

助産婦

川元さん、ご紹介ありがとうございます。川元さんとは、厚生省看護研修センターでの同級生でもあります。わが息子の産婆さんでもあります。お世話になりっぱなしでいます。他ならぬ川元さんより「いま、ひまでしょう」といわれ、「りれー随筆」のバトンをお引き受けしました。

今、仕事を離れて1年が過ぎたところです。決められたレールから、ぼんと飛び降りてしまい広い大地の上で、自分の無力さを感じ座り込んでしまいたいようでもあり、また無限の選択肢が与えられ自由に駆け出したいようでもあります。

私流のワーキングマザー

センターでの研修後、結婚しDINKS。出産して、ワーキングマザー。そして今、夫の仕事の都合で退職して家庭において充電中というところでしょうか。

さて“ワーキングマザーでした”といえは聞こえはよいのですが、家事と仕事の両立にあたっては多くの人を巻きこんでの大さわぎでした。私の住む横浜市はゼロ歳児保育施設が少なく、公立の施設には制限も多く、二重・三重保育での産休明けでした。私たちは、1歳過ぎにやっと保育園に預けることができました。登園は夫か、近所の友人。お迎えは、実母か義母に1日交替でお願いしました。(実母も義母も自宅から1時間半かけて、保育園に行き我が家へ連れて帰り、私が帰るまで面倒を見てもらい帰

宅してもらいました。)ときには、「単身赴任」と称して息子を実家に預けもしました。

息子が病気と保育園から連絡が入っても、会議だ授業だと手が放せず、夫に行かせると、保母さんに「お母さんは、こられないんですか!」といわれることもありました。思わず、夫も親だとはつづやいてみたりしました。

ともかくこのように、息子、夫をはじめ義母、実母そしてその家族の協力が得られて仕事が続けられる自分は恵まれていると感謝していました。

このようにして小さいうちは何とか乗り切ってきましたが、だんだん3歳ごろになってくると「ママ、もう遠くの病院には行かないで」とか「保育園には行かない。今日はお休みする」といい出すようになりました。今までなんといわれようと聞き流してきた私も、気持ちが揺らぎました。

仕事の面でも、ポケットベルを持って24時間対応ができるようにしながら、実習場をあちこちと駆け回りましたが、他のスタッフのようにには動けませんでした。もっと自由に動ける人に代わってもらうほうがいいのではないかと。子どもが心身ともに病気になって取り返しがつかなくなっては……。いろいろ考えるようになりました。

さらに去年の春、今まで家事や育児をよく手伝い支えてくれた夫が、3か月にわたる海外研修に出かけることになりました。さすがに私も母子家庭となっては保育のやりくりがつかず、



これからの厳しい実習時期を前に、常勤の仕事を離れることにしました。

そして、息子と自分に、今までよく働いたごほうびにと「ヨーロッパ子連れ旅行」をすることにしました。

ドイツでの休日

夫は、南西ドイツのカールスルーエにある研修所に入所することになっていました。私と息子は、夫が現地でアパートを見つけた段階で、足手まといにならないように暮らすからという約束で追いかけて行きました。

ドイツでの生活では、一女性として異文化を楽しむということ、息子と親子の触れ合いを深めようと心がけました。そして、さまざまな人々の生活を知り、自分のこれからの生き方、楽しみ方の参考にしようと思いました。

市民大学(成人学校)の日本語講座に会話の練習相手としてゲスト出演し、その後、受講生とクナイペ(居酒屋)に繰り出して色々な話をしたり、夫の研修仲間のドイツ人のお宅や、市民大学の受講生のお宅に招かれたり、一緒に動物園や温水プールに出かけていたり、土日を利用して旅行をしたりという日々を送りました。

また、日本式にいうなら2DKよりちょっと広いアパートに夫の仲間を招待して、日本料理を紹介したりもしました。

とはいってもやはり私は助産婦、街で行きかう親子連れに目がいたり、つい育児雑誌を手にしたっていました。

人々とのつながりのなかで

日本に戻って、家族、主に子どもを中心とした生活時間となって過ごすようになり、最近そのペースにも慣れてきました。

地域のなかで生活していると、施設のなかでは手のおよばなかったことにぶつかります。

障害のある子を抱えるお母さんの悩みを聞いたり、「オッパイのしこりが痛い」という褥婦にマッサージをしたり、初潮を迎える娘を持つお母さんとどのように準備しようかと話しあったり。また、母親自身の月経の相談を聞いたりしています。

まわりにいる人々とのつながりのなかで、どのように生きていこうかと考えさせられます。これからの自分と家族との生活のありかたをも含めて、自分にできる助産婦像を考えているところです。さて次はどんな汽車に乗りましょうか。それがどんな汽車であれ、途中下車している間に人々が私に与えてくれたものを大切にしていきたいと思います。それは、汽車にのってはいは、おそらく手に入らなかった貴重なものなのですから。

* * *

今回は、厚生省看護研修研究センターの同級生、岡野眞規代さんをご紹介します。在学中に、頭が硬くて授業案のできない私に「まあやってみや」といって励ましてくれました。大阪に戻られてからも、仕事に遊びにと活躍していらっしゃる岡野さんにバトンタッチします。